

日本文学研究資料新集

11

近代文学の成立

思想と文体の模索

有精堂

小森陽一 編

ISBN4-640-32528-2

——日本文学研究資料新集——

11 ^{きんだいぶんがく}近代文学の成立 ^{せいりつ}
^{しせう}思想と ^{ぶんたい}文体の ^{もさく}模索

定価 3500 円

1986年12月15日 初版発行

編 者 ^こ小 ^{もり}森 ^{よう}陽 ^{いち}一
発行者 ^山崎 ^誠

発行所 有精堂出版株式会社

〒101東京都千代田区神田神保町1-39
電話 03(291) 1521 (代)
振替口座 東京 9-40684

Printed in Japan ISBN4-640-30960-0 C3391

『日本文学研究資料新集』（全三十巻）刊行に際して

日本文学の研究は、戦後四十余年を経て、隆盛に向かうかたわら、再検討と新しい方法への模索が様々に試みられております。情報化時代といわれる現在の状況のなかで、未来に開かれた日本文学研究を形成して行くためには、当然のことですが、従来の研究業績を正しく評価し、その基礎の上に新しい成果を積み重ねることを志向しなければなりません。小社ではそうした要請に答えて、『日本文学研究資料叢書』（全百巻）を刊行して、学界ならびに各方面から多大の御好評をいただきました。

右叢書は、既発表の研究論文のなかから、従来の研究に大きな意味を持っているもの、あるいは新しい可能性を開拓しているものなどを選択し、各時代・ジャンル・作家・作品ごとに論集として編集し、各研究分野の、基礎的・基本的な情報を、出来る限り有効に提供することを目標としたものです。こうした趣旨を継承しつつ、小社は新たにテーマ中心の論集として『日本文学研究資料新集』を刊行いたします。本集では各巻ごとにテーマを掲げ、より深く研究対象を掘り下げて、今後の研究の進路を導く羅針盤ともなることを切に願っております。

今や国文学界においても、多数、多種の情報が、錯綜し、混乱して伝達され、情報の氾濫が真の学問的交流の支障をきたすかのごとくになっているようにさえ見えます。そうした錯綜の上に、老大な著作・雑誌・紀要等が続々刊行され、それらのうちのいくつかは、入手しようとしても、往々図書館にさえ具備されていないといったような、種々の困難が重なり、学問の発展を阻害する壁として立ち塞がっているのが現状です。こうした状況の中で、真に学問的なコミュニケーションを確保するために、本集は効果的な役割を果たす決意で新たに刊行されるものです。

日本文学の研究者、特に未来に伸びようとする若い研究者に、本集の趣旨が理解され、支持され、永続的な事業として継続刊行されていく力を与えて下さるように願ってやみません。

目次 ■近代文学の成立・思想と文体の模索

明治初期戯作者の文章……岡本勲・1

円朝文芸考……林原純生・15

近代文学と挿絵……山本芳明・24

——逍遙を中心に——



坪内逍遙と言文一致体小説……青木稔弥・40

坪内逍遙と言文一致……秋田徹・57

——逍遙の小説観の変遷に即して——

『新妹と背かぐみ』論……高橋修・68

——『花柳春話』を軸として——



「佳人之奇遇」成立考証序説……大沼敏男・84

——慶応義塾図書館蔵稿本と刊行本——

近代文学における叙述の装置・・・久保由美・103

——明治初期作家たちの「立脚点」をめぐって——

近代小説の言説・序章・・・三谷邦明・118

——小説の「時間」と雅文体あるいは

亀井秀雄『感性の変革』を読む——

話術の行方・・・亀井秀雄・129

他者へのまなざし・・・谷川恵一・142

——『浮雲』の世界——



森田思軒の出発・・・藤井淑禎・159

——「嘉坡報知叢談」試論——
通信

洋行と「からゆき」・・・出原隆俊・175

——反「舞姫」小説の位相——

『文づかひ』の決着・・・田中実・189

——テキストと作者の通路——

嵯峨の屋御室における浪漫主義の生成・・・松村友視・205

「残菊」以後の広津柳浪……宇佐美毅・218

——「悲惨小説」への彷徨——

近代小説創始期の理想像……十川信介・231

——明治二十四年における「ドラマ」の問題——



解説……小森陽一・249

〈思想〉としての〈文体〉／

〈文体〉としての〈思想〉

参考文献……小森陽一・264



執筆者一覧……269

明治初期戯作者の文章

岡 本 勲

文章のスタイル全般についてそれは言へるが、個々の文法的事象についても亦言へる。

この時期では、未だ所謂普通文と云はれる実用向け実務用の文章が、一定のスタイルのものとして世間で確立されるに至らない。然しながら新聞記事の文章など、ゆれを見せながらもほど一定のスタイルを示しはじめて居り、それは後の普通文の原型をなすものである。これらを適宜、明治式合巻のスタイルと比較する。それによつて、合巻のスタイルの個性を、平凡で世間並みで書手の個性の余り出でゐない文章との対比でより鮮明に記述したい。

更に必要に応じ、明治二三十年代の成熟期普通文での状態とも比較を試みた。それによつて、近世から継承せられたものが、近代的文体へと変化する歴史的過程の中でどの位置づけをしてみたい。本稿で調査対象とした明治式合巻は

高橋阿伝夜刃譚

仮名垣魯文

明治十二年

嶋田一郎梅雨日記

岡本起泉

明治十二年

本稿では明治十二、三年に出版された明治式合巻の文章を分析する。近世的な文学形式や文体の継承の上に、その影響を強く受けながら、新しい明治の時代の内容を盛り込んだ明治式合巻の文章の性格を検討する事を通じて、近世的なものとの明治的なものの接点に焦点を当てて見たい。明治式合巻は、近世の合巻の系譜のジャンルである。その点で、近世的なものを、文学の型式と同時に文体の上にも色濃く内包してゐる。然しながら、その内容は高橋お伝の殺人事件とか神奈川県真土村で起つた農民暴動とか人氣俳優沢村田之助の一代記など最新の有名事件をきほものに執筆したもので、その意味で新旧両文体の接点を考察するのに適当であると考へる。

この時期は、明治二三十年代の真の近代文体へと展開する過渡的な様相を持つ。明治式合巻に、七五調や陳腐な懸詞が多いなど

沢村田之助曙草紙

岡本起泉

明治十三年

冠松真土夜暴動

武田交来

明治十三年

の四篇である。テキストは筑摩書房『明治文学全集』2所収のものによつた。稿中では「高」〔鶴〕〔沢〕〔冠〕と略記する。引用文末尾には必要な場合『明治文学全集』の頁数を記した。これら四篇には共通する文体的要素もあるが、作者の違ひ、小説の場面や登場人物などによる相違など多彩で、ゆれが見られる。この問題にも注目して行きたい。

2

明治式合巻の文は概して非常に長く、連用中止や接続助詞「に」「が」「も」「は」「と」「で」「つゝ」「ど」「ども」などでいつまでも文を続けて行く。殊に「ば」「が」「て」「に」「と」は一文の中で繰り返し何回でも使用する。このほか

梅吉と披露して芸子となりし其間もなく馴染も多く出潮に月代登るばかりの全盛に客の絶間もなかりける其中別て最負にせし客は阿波の徳嶋の船持にて其頃道頓堀の出店にて

(鶴)七八

のやうに「その」「この」など連体詞で受けながら続ける書き方もよく行はれる。

七五調や、完全な七五調でなくとも一種のリズムにのつてゐる箇所が多く、このやうな文脈では

何といひ解く術さへも白歯の娘の只ぶるゝ頓て言葉もなくばかり

(鶴)六九

引や車のくるゝと世も地走のはしるが如く変る手毎に袖薫る夫も慈童が夢の間と過し昔しものぶざり (鶴)六一
お伝はそら泪しはしが程は伏柴のこる計りなる嘆きのけはひなど、懸詞・縁語・序詞などの修辭が駆使されてゐる。然しながら、これらは多く

(高)四六

夫とも白髪のお婆

虚かまことかしら紙に書いた証拠

別れた女房としら波の宵に薄手を 夜に紛れ跡しら波と立

去りしが 斯る毒婦としら化のお伝に

(以上)(高)

今は詮かた亡妻の

いとと思ひも十寸鏡

いとと歎きを

ますら男が

何と答へも涙ぐみ

暫し答へも惱の葉の散

るものなりと

呼べき人もあら悲し

それらの用意もあら悲し

ふまぐれ

内に喻へも夏草の葉末の露の

(以上)(鶴)

のやうな、極めて類型的で陳腐で単純でありふれた懸詞であり、類似の表現が同一作品の中で繰りかへし用ゐられてゐる。作者が創り出した表現ではなく、先行作品のどこにでもあるやうな耳なれたものを安易に持ち込んだに過ぎない。勿論、それはこれら合巻の低い読者層にも容易に受け入れられるなじみ深い表現であつた。そしてこれらの多用は、文章の印象を頗る卑俗なものにしてゐる。右のやうなスタイルのものの中には、浄瑠璃の詞章を意識的に模倣したかと思はれるものが相当ある。

思案にくるゝ春の日の花や散るらん入相の鐘の音高く耳元に響くにびつくりア、もう暮るそうなど足を早めて帰りゆく

(「沢」九九)

今一度田の助にあふた上にと思案を定め恋にはくらき路も厭はず浅草さして走りゆく 君が一夜の情には妾が百年の命を絶と云たる名に大磯の帟にもまさり (「沢」一〇〇)

身ぐるみ斜いで腹愈せんと尻端折強刀腰に走出る跡についで子分のふたり追付ところは木曾街道と脚をはかりに駈り行く○木落て千山瘦天高くして一鴈横たふ知らぬ山路を行秋の月さへ匿る屏風が嶽方向に迷ふ九十九折病ひに脚もはかどらぬ波の助が手を引立 (「高」三三)

常修菩提犯せる罪もはれてゆく真如の月に能消除皆帰妙法一天四海ゆたかに治まる御代の徳大逆無道の一族に科の及ばぬ有がたさ (「嶋」九六)

のやうであるが、殊に右の二番目三番目の例のやうな段落と段落のつなぎ目の書き方に浄瑠璃の影響が鮮明に読みとられる。このスタイルは岡本起泉の文章に於て著しい。

なほ、七五調や懸詞などを用ゐた文は、概して筋の展開の上でクライマックスとなる所とか、登場人物の心情を連綿と吐露する所、それに段落の冒頭とか末尾に多くあらはれる。

尤も、このやうな修辭や技法は、「冠」では殆ど見られない。この点で他の三篇「高」「嶋」「沢」と異なる。「冠」は真土村の富豪と零細な農民との間の裁判や暴動を描いた社会小説であつて、法律や訴訟に関する公的文脈が多い。この点で「高」「嶋」「沢」が主人公の私的記録であるのと対照的である。七五調や懸詞など謂はゞ余裕のある筆の遊びであつて、「冠」のやうな切迫した事件を

忠実に描出し、且つ抒情的場面のない作品には向かないのである。

このやうな小説の内容と文体との相関は、漢文訓読語の用ゐ方の相違と云ふかたちでも亦現れてゐる。「高」「嶋」「沢」を見ると、漢文訓読語は小説の序文や前書きや文中で作者自者の意見を述べる草子地的な箇所には、「曰く」「と雖も」「も亦」「……而已」「所」(例——本篇に載る所の島田長等の如きも「嶋」)「豈……べけんや」「宜しく……べし」「……能はず」など相当用ゐられてゐるが、それ以外の小説の本文では、概して訓読語の使用が少い。それでも或る程度用ゐられてゐる語を拾ふと「未だ……ず」「且」「即ち」「も亦」「……のみ(文末)」「と雖も」「を以て」(例——賭博を以て飲樂の第一とする「高」)「如く」(例——東京住居に如くはなし「高」)「既に」くらゐである。「と雖も」の用例はその五七パーセントが序文前書きなどに集中してゐる。又、引用の「曰く」は序文などに限られ、本文では専ら「いふやう」「いへるやう」「語り聞かすやう」「申すやう」「頭を下げ……と云」などの和文形式となつてゐる。

これ以外「而して」「併しながら」「そもそも」「曾て」「況んや」「所以」など、普通文ではよく用ゐられるが、こゝではほんの一、二例に過ぎない。たま／＼用ゐられる事もあると云ふ程度である。漢文訓読語は、作者が自己の立場や意見を述べたりする文脈に向いてゐる。小説の筋の展開する本文では訓読語のうち極めて普及した語のみである。然しながら「冠」に於ては全般的に訓読語が多く、

扱また志しある人々が打よりて松木が事もその人一代の所業

に於ては如何にも悪むべき事なれども渠も數代の名家なり今一旦の過失より墳墓さへ止め得ざるは又渠が為に哀まざる可からずと

〔冠〕二七

のやうである。書手の好みに加へ、公的文脈の多い文章には漢文訓読語が向いてゐると云ふ世間の習慣が影響してゐるやうである。これと関聯して、〔沢〕では上野寛永寺の学頭凝雲院、執事天山など身分の高い僧侶の発話には訓読語を多用してその人物の威信を彷彿させると云ふ技法が見られる。訓読語が位相的な言語である事の反映である。

ところで、作品による相違で今一つ挙げるべきは、〔高〕に於て古典や雅言、擬古文への志向があり、それが文章基調の「俗」と同一次元で混在してゐる事である。先づ

闇はあやなし怪しき夢を結ぶ巫山の高いびき

迷ひ入る山の奥にも小男鹿の妻や乞ふらん

遠近の里とはいへど山近く冬の夜風の訪ふ外は往還途絶し安旅舎

落る木の葉の輕井沢妹が懷ろさむしろに法衣うつなり肌さむき山中村の古祠

など有名な古歌の引用によつて綴れ錦を織りなし、

今は美男の波の助も看るにいふせき弱法師

伊兵衛夫婦も知らでありしを阿漕が浦の夫ならで遂にあらはるゝ端をひらけり

のやうな語曲などをふまへた書き方は、他の三篇では殆ど見られない。

そのほか、「寐まりし後」「その夜さり」「紫陽花のはなならなくに」「やんごとなき御身の上」「夢にだに知ろしめさず」など古語を用ゐたり、助詞「ものから」を「安ゑもんは夫と推し絶て面を合せぬものからお伝は此家を疾去らんとおもひ定めて」のやうに、意味は順接であるけれども頻回に用ゐてゐる。〔嶋〕「沢」では二、三例しかなく、〔冠〕では全く使用してゐない。

このやうに、作品によつて、俗の中に雅を点ずるか、俗一色であるかは、作者の教養や好みによると同時に、〔冠〕のやうな社会小説には雅はふさはしくないと云ふ要素もあるやうである。

3

会話文を見ると、その文体は次の三つの類型に分けられる。

①当時の話言葉を書實的に直接話法で書くもの ②一部分を文語化し文語口語入り雜つたもの（この中には口語で書いて行つて末尾のみ文語として、逆に文語で書いて行つて末尾のみ口語と云ふものもある） ③全部文語で謂はゞ間接話法で書くもの

これらの使ひ分けを見ると一般的傾向として、短い発話や日常的庶民的話柄は①となり易く、長い話しで内容的に纏りのあるものや、過去のいきさつを物語る場合など筋のある発話は②更に③となる。これと関聯するが、私的発話ほど①となり易く、あらたまつた場面、威儀を正した発言など公的文脈では②又は③となる。次いで発話の主の身分職業性別などによつて見ると、〔嶋〕での士族の男子や巡査など③が多く、短い発話でも

一郎の顔を不思議そうに打眺め「オ、一郎君にてありけるか

扱は只今拙者が危急を救はれたるも貴殿にや恭けなしと幾度
か礼を述べて

(嶋)六六

のやうである。女子の発話は概ね①が多いが、

「いふが中にも妾ほど世にあぢきない者はなし親に添寝の夢
にさへ見も知りもせぬ人中へ売られ廓のうき勤禿の内の気苦
勞は眠る日影を追おこされて文の使や返事さへ」(嶋)七一

のやうに、長々と身の上ばなしをする場合や

絹布ぐるめの榮耀をさせ出世するのを見たい計り今更いふ迄

もなければ和女は二人の親御に早く別れて

(嶋)六九

のやうな、継母が娘に説諭する言葉など年輩の女子では②となる
事がよくある。

このやうな発話の主の身分などによる書き分けは「嶋」「沢」で
はつきりしてゐる。人物像の描出で重々しい人物や発話に文語を
用ゐ、軽い場合に口語を用ゐる事によつて効果を上げてゐると見
られる。

ところで、文語で書かれてゐると見える場合でも、仔細に見る
と「乳房たづねる嬰兒」「幅をきかせるより」「見受れば左のみの
困窮とも思はれず」など下二段活用的一段化や、「よく欺誑して
取れる、や否哉おそらくは渡すまじ」のやうな可能動詞も含まれて
ゐる事がある。そのほか口語的発想の表現が文語の中へ入り込ん
でゐる例を挙げると

不思議そ、に打眺め 思ふて、くれるは嬉しけれど

要人がいひしこと共をさすがにあからさまにも言憎くて

此身を慕ひおる事とは白真弓 身分だけを士族の列に加へ

てやりたしと 然れと又名人と云はれる大あつて田の助は
余人の遠く及ばぬ氣象を持てり

などがある。これらは「冠」では少い。「高」「嶋」「沢」など通

俗的庶民的日常的な事柄の表現には向いてゐるが、公的文脈の多
く、漢文訓読語も比較的多い「冠」には調和しないやうである。

次いで、使役の助動詞連用形「せ」を「傍へに侍らし、酒宴を開
き」「草鞋を解かし、上に請じて」「旅駕籠に昇乗らしお伝は傍へに
附添て」のやうに四段活用的に書く語法は殊に「高」に多く見ら
れる。こゝでは「浜次郎は東京に車を飛ばせ今は麴町八丁目に」の
やうな「せ」と併用せられてゐる。このやうな現象は近世に見ら
れるものであるが、降つて明治普通文では通常見られなくなる。

「高」の出版された明治十二年はその過渡期であつた。

これと同様、近世的語法で明治に磨絶したものに接続助詞「つ
つ」を二動作の同時的継起を意味するのでなく

死骸の形象を繕ひツ、かいまき打かけ臥したる体にもてなし
て蒲団の下なる胴巻を引出し

(高)五八

小静の手を取り無理に引立てゆきながら耳に口よせナ、ソレ
よしかと耳語つゝ出てゆく跡見送りて

(沢)一〇五

のやうに接続助詞「て」と置換へても意味のかはらないものがあ
る。橋本四郎氏は、このやうな「つゝ」は近世後期に於て「八大
伝に出て来ることよりも、合巻で目立つて多い」点を指摘せられ
たが、明治式合巻で多用せられるのは、文学の型式が近世の合巻
を継承してゐるので、その語法も亦自ら近世のそれを引きついで
ゐると考へられる。

尤も「つゝ」の用ゐる方は作品によつて異なりを見せる。「高」では頗る愛用し、中には

去程にお伝は一ト月余りを経て突然大麻生村なる浜次が家に
来りッ、前に預りたる三百円の地券書を返しッ、今度房州天
津辺にホシカの上品ありと聞けば
(高)五四

のやうに、一文の中で繰返し用ゐる例も散見される。これと比較
すると「鵜」[沢]では「つゝ」の用例がやゝ少く、「冠」ではわ
づか六例しかない。その上、「飛乗る馬の轡面をガツキと押へ哮
り狂ふに任せつゝ、次第／＼に跡へと戻し勢ひ弛みし度をはかり」
(鵜)八六のやうな、二動作の同時的進行を意味する例もあり、
更に「鵜」[沢]では

仁八は情念に礼を述べつゝ、其胸巻を解き見ると中には金子五
十兩と
(沢)二五

お作は喜こびつゝ、密かに臥床へ帰りゆきぬ……(中略)是より
此群が文一方へ至る度毎にお作／＼と厚く目をかけつゝ、尚も
怠みなく事を謀り
(鵜)九二

のやうな、二動作の同時進行とも、又「て」に通ふものともどち
らとも見られる例が頗る多い。「つゝ」の意味について、はつき
り意識せず、安易に用ゐてゐるやうに見られる。

明治の新しい時代の文語ではすたれたこの意味での「つゝ」で
あるから、この時期でも既に過去の遺物と云ふ面があり、従つて
それをどの程度用ゐるか、又どのやうな用法をするかは個人の好
みの問題であり、ゆれも亦大であつたと考へられよう。

次いで、「ぞ」を接続助詞「に」に下接させ、「にぞ」で恰も一

語の接続助詞のやうに用ゐる語法がある。

只黙然と手を拱ぬき母の様子を伺がひおるにぞ、貞松は其所へ
坐し
(鵜)九〇

衆之丞が白骨を取取め来りしとて安房屋まで立戻りしにぞ、仁
八夫婦は今更のやうに涙に咽びながら厚く謝し早速菩提寺へ
埋葬をして懇に弔ひし跡にて
(沢)一二六

この表現は近世の或る種の文章には好んで広く用ゐられたが、明
治ではすたれた。⁽³⁾「高」[鵜]「沢」ではよく用ゐられるが、「冠」
では用ゐられない。

「冠」では、「高」[鵜]「沢」に広く用ゐられる「て」に通ふ
「つゝ」、接続助詞「ものから」、接続助詞的「にぞ」などの近世
的要素が殆どなく、その意味ではより近代的と言へる。

4

係結について。「こそ」による係結が四作品で係結全体の六二
パーセントを占める。「こそ」には「お谷は今こそ十分の金にせ
んものと其向口を探すをりしも横浜居留地の或る英國人がいつか
お梅を見そめ」(鵜)のやうな結びの流れたものや「おのれよく
こそ現在の本夫に等しき我に對しうま／＼毒を飲したなといふ口
押へて」(高)のやうな口語的発想の「こそ」が頗る多い。この
やうな口語的な「こそ」は、地の文にも広く見られる。これらを
加へて計算すると七二パーセントまで「こそ」が占める。

「こそ」が逆接条件句を形成する例は数例に過ぎず、大部分曲
調終止である。逆接条件句の場合

武道こそ一郎に劣れ共、文学は衆に勝れて (〔嶋〕六六)

面容こそ太くやつれたれど、正しく彼のお谷婆々なりければ (〔嶋〕九五)

其衣類こそ穢きも、磨きあげなば一廉の美少年なりと懸想をなし (〔沢〕一一九)

のやうに逆接の接続助詞を添へる例の見られる事は、「こそ」の逆接条件句を形成する力の弱さを物語つてゐる。

更に、「こそ」による係結の呼応の乱れを見ると、「今こそ仕すましたり」と「在所へこそは急ぎけり」「基とこそは知られたり」など結びが終止形となる類型のものが多く、「こそ」全体の三三パーセントを占める。

右に見た「こそ」に関する事實は、「こそ」が口語の世界で強調の意味の係助詞のかたちで存在してゐる事の、文語への投影と見られる。即ち、「こそ」による係結は、近代語的骨格のものであると云へる。

因に、結びが終止形となるのは「こそ」と限らず

又もや罪を重ねづま因果は後にぞ思ひ知られぬ (〔高〕四九)

斯まで早く廻りくる此身の因果ぞ恨めしと男ながらも重兵衛は思ひ屈して (〔嶋〕六三)

旧来の知己と云にも非ぬ人々が宿世いかなる因縁ありてか所謂自他平等の功德なるべし (〔冠〕二二五)

是なん絵の影を前にし活版後になれるを以ての齟齬なり、

(〔高〕一一)

など、「ぞ」「か」「なん」などの場合にも亦見られ、係結の呼応

の乱れは、すべてこの類型である。(4) 明治の係結は一般に、「ぞ」で已然形とか「こそ」で連体形とか、種々のかたちの乱れが見られることがよくある。それに比較してこれら合巻の係結は乱れと云つても、その乱れのタイプが一定してゐると言へる。

ところで、係結の用例を見ると、例へば

おでんこそ我娘なれと 信濃路にこそ趣きけれ 寒くこそあれ 子細ぞあらんと うるさしとや思ひけん (以上高)

事こそかはれ 鹿兒島へこそ趣きけれ 何をか包まん 起しやせん (以上嶋)

のやうな、係助詞と結びとの間の字数の少ない、謂はゞ短い係結が多い。これらのうち「……とぞ思ひける」「……こそよけれ」「……とこそ知られたり」「……とや思ひけん」「……にやあらん」などは、一種のきまり文句として固定的な文末辞となつてゐる。そしてこの場合、呼応の乱れは通常見られない。

これに反し、「是こそよき金を出す手掛りなり」とのやうなやゝ長い係結では、概して末尾が終止形となつたものが目につく。換言すれば、「こそ」の結びを已然形とすると云ふ規範は、目うつりしない近接した箇所に係助詞と結びの用言とが並んでゐる場合には容易に働くけれども、その間があくと働にくく、終止形をとりがちなのである。

以上のやうに見ると、明治式合巻の係結は、古代語的な係結から大きく変容して形骸化したものとなつてゐると言へよう。

なほ、「冠」では係結の使用が「高」「嶋」「沢」に比し非常に

少なく、九例のみである。近代文語の中での係結は文の飾りと云ふ性格があり、表現上、重きをもつた必須の要素ではなかつた。実用的実務的な文章に於ては、例へば新聞記事など、係結は例外的と云つてよい程わづかしか用ゐられない。〔冠〕に於ける係結の少なさは、その筋や内容が農民の暴動と云ふ謂はゞ新聞記事的なものである事と深くかゝはつてゐると見てよいであらう。

5

文法的規範意識といふ事については先の4で係結と関聯して視つてみたが、更に別の角度から検討してみたい。

先づ、過去の助動詞「き」の連体形「し」を終止形の位置に用ゐる「此時甘輝は宗十郎和藤内は家橋なりし」〔沢〕のやうな語法は、詠歎とか余情とかと関係なく広く行はれ、逆に「き」と云ふ終止形の例が全く見られない。無論引用の格助詞「と」に上接する時も常に「何れも死刑に処せられし」との事に一同愁傷いはんかたなく〔嶋〕となる。

この時期の世間一般の文語を見ると、「し」と「き」と書く事は少ないが、文末の場合は「き」「し」併用せられる事が多い。これら合巻の語法は極めて単線的と云へよう。

なほ、〔冠〕では、「し」は「留る」ことになりしが、のやうな文中の位置のみで用ゐられ、文末「と」の上接などの位置に来ることがない、用法の限定の枠が非常に狭い。

次いで、過去の「けり」が文末の位置、又は「と」に上接した場合を見ると

家は彼処と導かれまづ門辺より音なひけり、 (高)
未酔心の醒やらぬ吉蔵はおでんがまに／＼泊ることに定めける、 (高)

皆が噂も宜なりけりと重兵衛は深く喜こび (嶋)

同氏よりは赤飯を振舞無事の対面を祝し各々帰村なしけるとぞ (冠)

など、各作品共「けり」「ける」を併用し、両者は伯仲する程である。

このやうに文末の終止形の位置の「し」「ける」のさかんな事は、当時の大衆的な文章によく見られるところであるが、終止形連体形を併用する文章も多く、この点からすれば、これら合巻の語法は、当時として最も通俗的なきはみに位すると言へよう。

さて次に「尊敬せらる」か「尊敬さる」かについて見る。多くの用例は「探索されしが」「案内され」「養育されし」「登庸され」など「さる」であるが、〔高〕で主人公高橋お伝が逮捕せられてから後の部分では「糺問さるゝに」の語法より「糺問せられしか」「捕縛せられたり」「拘留せられ」のやうに法律関係の用語を中心に「せらる」が多くなる。又、〔冠〕では裁判刑事関係の記述が多く、そこでは「護衛せらるゝは」「糺問せられしに」「受理せらるべし」「護送せられたり」「事情を酌量せらるゝ事」など「せらる」となつてゐる。「せらる」の方が「さる」よりあらたまつた語法との語感があつた。例へば新聞紙面を見ると、政治軍事論説など硬い記事には「せらる」が多く、庶民的な記事ほど「さる」が相対的に多い傾向が見られる。従つて、合巻の公的文

脈で「せらる」が主として用ゐられ、それ以外で主として「さる」となつてゐるのは、このやうな「せらる」と「さる」との表現価値の差のあらはれと考へられる。「さる」が庶民の日常的感覺のものであるのに対し、これと異なる世界を描くのに、硬い語感の「せらる」を用ゐてその雰囲気を出してゐる。

このやうに許容事項的語法とそれに対応する古い語法との間に表現価値の差の認められると云ふ現象は「酒色に耽るの癖」のやうな助詞「の」を挿入する語法についても亦見られる。「高」「嶋」「沢」「冠」の四篇共、全般的にこの語法は少なく、通常「慰むる術」「実父を便る外なければ」「風月を愛する外はなかりし」など「の」を入れない。それが、或る種の特種な文脈にのみ頻繁に用ゐられる。

即ち、一つは「嶋」「沢」で士族の男性とか身分の高い僧侶の発話の中で

夫を防ぐの違なく無念ながら山賊のために命を落すかと思ふをり
(嶋)六六

一同を呼出して突合せ吟味を致すの外なし
(沢)一一三

兼てしも逆浪天を衝かんとするの噂ありし薩海の暴徒いよ
激発して其岸を離れ既に肥後路へ漲ぎり入りしと聞より

(嶋)八八

未だその頃は此難病を愈すの方法なきものから医師もはか
しく力を尽さず

(高)二七

のやうな政治情勢とか医療の水準などを述べる謂は公的文脈に

見られる。

第三の場合は、「高」「冠」に於て、各章段の冒頭の前置きの文章とか、本文中で作者が顔を出して意見を述べる箇所によく用ゐられる。

感化風動は必ず其人の言行善惡を表するの鏡なり。唯、勸めて雄の時を告るや則ち阿伝が奸惡その本夫或ひは情夫に及ぼす如き波之助が顛末以て将来の戒めとす
(高)三八

このやうな箇所のスタイルは本文と異なる点については既に2で見た所である。

普通文に於て、この語法を多用するのは、主として公的な文章や学術的内容の文章、それに論説文などがある。大衆向けの読みものなどの文章には殆ど出て来ない。このやうな位相的限定の故に、合巻には向かないのである。然しながらその中の或る文脈には、この語法を用ゐて、それ以外の文章とのコントラストを醸し出してゐる。

なほ、許容事項的語法とより古い語法との間のニュアンスの差が、いつも右の場合のやうに書き分けられてゐるとは限らない。例へば「復籍さするも」「自首させ」「再興させしに」などは常にこの「さす」であつて、「自首させ」と書いた例が見られない。又、サ行四段活用動詞に過去の「し」「しか」の下接した際の「殺害なし」「臥し」と云ふ語法は「高」にのみ二例だけ例外的に見られるが、他は総て「なせし惡事」「取逃せし」と「奉公なせしかど」など「せし」である。

これらは許容事項的語法を専らとするので、この点明治式合巻

の文章の通俗性を示してゐる。そしてそのやうな文章の基調であるが故に、正格の語法はきだつた印象を与へるのである。

6

助動詞の用法と云ふ観点より見ると、先づ常用せられる語の範圍や活用形の完備不完備について、作品によつて大きなばらつきのある事が知られる。

回想完了の助動詞を見ると、「高」では比較的語数、活用形共豊富である。「き」「けり」「ぬ」「つ」「たり」「り」みな用ゐてゐるが、活用形では、「き」終止形がなく、「つ」は終止形と已然形のみである事、「ぬ」も終止形以外「明ぬるを」「知りねと」など孤例で、已然形はない。「り」は終止形と連体形のみ用ゐられるなど、やゝ完備してゐない。このうち「たり」は未然形・命令形以外全部よく用ゐられ、六語のうちこれだけは完備してゐる。

「嶋」[沢]では「ぬ」「つ」が特別の場合しか用ゐられず、更に「冠」では「つ」がなく、「ぬ」も一例だけとなる。

普通文では、新聞記事など「ぬ」はたまに出て来る事もあるが「つ」は通常用ゐられない。「ぬ」「つ」は謂はゞ文芸の文章に頻用せられる。従つて、これらを用ゐない「冠」は実用向けの文体で書かれてゐると云へる。先にも別の観点から見た「冠」の社会小説としての、新聞記事のスタイルとも通じる面を示してゐる。

「たり」と「り」について。「り」は活用形が「たり」より少ないばかりでなく、用法ないし、「り」が好んで下接する語に本来の文語文法より狭い或る種の枠がある。

終止形「り」は「帰巢せり」「関係せり」「出立せり」「密会せり」「到着せり」「成就せりと」など漢語二字サ変動詞に多く下接するのが特色である。そして、和語では「帰り去れり」「引きかへせり」「用事ありて来れり」など、人の移動を表はす語によく下接する。但し、この事は終止形についてのみ云へる事で、連体形「る」などには当嵌らない。

完了「ぬ」と「つ」について考察する。但し「高」以外では用例が僅少なので、「高」のみを対象とした。

先づ「つ」を見ると、その用例は皆

森のからすに驚ろかされてゐろりの端に転び寐しつ、佐渡の夢をや結ぶらん (高) (二)

三十七人その夜更を量りて一度に勘さぬもんが家の前後に押寄つ、先に立たる一人が雨扉激しく打敲き大声上て呼はるやう

(高) (五二)

のやうな、何々しながらとか何々するとなどの意味の接続助詞的なものばかりである。本来の完了の意味のものは終止形「つ」の用例中にはなく、「隔ちつれど」「有つれば」など已然形の用例のみである。

「ぬ」の意味は、「つ」との対比の上に論じられるやうなものでなく、単に完了と云ふ大まかなものである。従つて無論その中には

挑灯照らさせて聳とむすめを其夜のうちに後閑村へ送りやりぬ、

(高) (八)

免罪の後再び実家に入籍させぬ、

(高) (五一)